



関西学院同窓会 大阪支部

INTERVIEW

<http://www.kwangaku-osaka.org>

2015

FILE
No.02

04

「文化大国」が考えるグローバル化とフランス

「日本」という名の美しさに惹かれて

小島 幸保編集室長（以下小島） 本日はよろしくお願ひします。今回はフランスというテーマです。フランス文学卒の編集員・中野も一緒にさせていただければと…。ところで総領事は日本語が大変ご堪能でおられるのですが、日本には何年居られるのでしょうか？

シャルランリ・ブロンソー総領事（以下ブロンソー） 総領事としては一年半ほど前に京都に赴任しましたが、当初は留学生として立教大学の法学部政治学科で国際関係論を学びました。その後フランス外務省の入省試験を受け、そのまま二等書記官として東京の大使館勤務となりました。3年おりましたでしょうか。いったんフランスへ戻り、

1995年から5年間、再び東京におりました。小島 もともと日本に興味をお持ちだったんでしょか？

ブロンソー もちろん。小島 きっかけは？

ブロンソー 色々ありましたよ。一番根源的なきっかけというのは、11歳ころにありました。フランスの学校ではお昼の休憩が2時間あります。最初の1時間で食事を済ませ、残る1時間を利用して私はよく図書館に行っていました。そこに世界の文化に関する美しい図説があつたんです。その中の日本に関する本を見ていた時、先生が私の後ろから声をかけて、表紙に書かれている「日本」という漢字のもつ意味を教えてくださいました。なんと素晴「日」は太陽「本」はオリジンだと…。なんと素晴



在京都フランス総領事
シャルランリ・ブロンソー氏

らしい言葉なのかと大変感動いたしました。この時の経験が日本に対する興味の根幹にあると感じています。ちなみにその時の先生は今広島大学で教えておられますよ。

小島 そういったイメージをお持ちになられて、実際に日本に来られて、イメージとは違いはありましたか、それともイメージ通りでしたか？

ブロンソー だいたい25年前の1989年。フランス革命200年記念の年のパリ祭の次の日に飛行機に乗って来日しました。これが最初の日本滞在ですね。その時の印象は「テクノロジ大国」といったところでしょうか。当時のアメリカや他の欧州各国に行っても、そんな印象は受けなかったのですが、日本にはあらゆる分野にテクノロジが浸透していると感じましたね。それでありながら古いものも愛しているとも。2週間の滞在でしたが、宿泊しているホテルの傍に毎晩屋台のラーメン屋さんが来ていたんです。数人座ればいっぱいになる屋台で、とても美味しいラーメンでしたが、そういったものがテクノロジと共存していることに大変興味を覚えました。

小島 その後東京でお仕事をされ、今は関西に：それぞれ感じることは違いますか？

ブロンソー 違いますね。東京と関西について、もっとも外国人にも分かりやすい顕著な違いは「味」ですね。ただ人とのコミュニケーションという点では、私が外国人であるせいか、あまり違いを感じません。例えば電車や地下鉄に乗っていて、私がシートに座っていたとして、その隣に積極的に座ろうとする日本人は少ないですね。これは東も西も同じです。

関西は特殊なケース

中野順哉編集員（以後中野） フランス総領事館のあるアンステイチュ・フランセ関西では、毎月のように催し物をされていますね。3月にはアカデミー（※1）、4月にはフランコフォニー（※2）、6月にはフェット・ド・ラ・ミュージック（※3）、7月はパリ祭：昨年は12月に特別な食事も催されたとか。こういった活動は日本ならではの活動といえるのでしょうか？

ブロンソー 京都のように総領事館がアンステイチュ・フランセと同じ場所にある、これは特別なケースなんです。また総領事がアンステイチュ・フランセの館長を兼ねるといふ点も珍しい：さらに関西という一つのエリアに京都だけでなく、大阪にもアンステイチュ・フランセがあるということも、特殊ですね。この特殊な状況を最大限に活用し、文化的なアプローチを心掛けたいと考えています。2009年に総領事館は大阪から京都にうつり、今は京都に本拠を置いていますが、そ

れも、こういった点：つまり文化を前面に押し出した関係性・創造性の追求という点では意義深いのではないのでしょうか。そしてそのことが延いては日本人が感じている「文化の国フランス」というイメージにも呼応できるのではないかと。

中野 文化的アプローチとして既存のもの：例えばフェット・ド・ラ・ミュージックやパリ祭などもあれば、逆に総領事が独自で考えられた催しもあるのでしょうか？ 例えば4月のフランコフォニーなどはどうなんですか？

ブロンソー 独自性というよりも、相互に巡回させることの方が、意味は大きいのではないのでしょうか。4月のフランコフォニーは京都のアンステイチュ・フランセ関西から生まれたものですが、メインテーマは巡回にあります。フランス語は色々な国で話されている言語です。その多種多様なフランス語圏の文化を、日本全国のアンステイチュ・フランセをめぐって紹介していくというものです。先日にもフランコフォニーの一環として、名古屋のカナダ総領事とともに徳島に行きました。6月のフェット・ド・ラ・ミュージックも、そもそもは6月21日の夏至の日のお祭りですが、東京・横浜で演奏したアーティストが、翌日大阪にといった巡回をしています。もちろんフランコフォニーにおいて京都でしかできないことはあります。「花見フランコフォニー」といって、アンステイチュ・フランセ関西に生えている桜を愛でながら：というものですからね。

大阪での活動・その可能性

中野 京都とのマリッジはうまくいっているようですが、大阪との可能性はいかがでしょうか？

ブロンソー 巡回の具合で京都だけに終わるといふ場合もありますが、基本的にはもちろん京都だけを「関西」と考えているわけではなく、大阪とも、また神戸とも連動して催しをしてゆくということも考えています。理想的には大阪でも京都と同じだけの催しを企画できればいいのですが：地理的に近いので全く同じものではなく、少し内容をかえたいですね。先日はイラストレーターの方に大阪では講演、京都では翌日ワークショップをしていただきました。ともあれ京都はパリの姉妹都市です。それを象徴するのが10月のニュー・ブラシユ「白夜」（※4）という催しです。残念ながら大阪市はフランスとの都市との提携がまだ結ばれていないので、そのことも大阪がメインにならない理由でもありますね。でもフランスとのプロジェクトとしては毎年夏に「アート大阪」（※5）という現代アートに特化したイベントがあります。また昨年はフェット・ド・ラ・ミュージックとして大阪ではテレマン室内オーケストラによる



演奏会もありましたし。ナレッジキャピタルとともに企画した大規模な日仏討論会も盛況のうちに終えることが出来ました。何と言いましても大阪にはフランス料理を愛してくださる方が多いので、ガストロノミー関連のイベントも設けることができればと思っております。昨年12月にシャンパンの美食デザイナーを開催しました。場所は京都だったのですが、大阪のフレンチのシェフに腕をふるってもらいました。これは今後フランスから大阪を考えると、より深めていくべき要素ではないでしょうか。

中野 京都・大阪を文化の視点で見てこられた総領事として、逆にビジネスに関してはどうでしょう？ 既存のビジネスの発展、あるいは新しいビジネスの可能性……そういったものを「関西」に感じておられますか？

ブロー 経済はとて大切な要素で、この地域にはフランスの企業も常駐しておりますし、私としては他の地域とは違った、関西色を前面に打ち出した展開が出来ればと期待しています。例えば関西空港。パリと大阪の直行便を出している空港会社はエールフランスのみで、全日空もJALも出していません。そこへきて観光にも多くの可能性を持っている地域でもありますから、大きなチャンスがあると考えています。また京都・神戸・大阪など関西には大学をはじめ多種多様な研究機関があるということも魅力的ですね。幅広い分野でコミットできる可能性は高いでしょう。現に今年の10月から一年をかけた、日仏でのイノベーションを深化させる企画も予定されています。そこでも関西独自の「温故知新」的な発想が力を発揮する可能性は大変高いと思われまます。まずこの10月はファッションでのイノベーションを図

り、最終的には一年をかけた独自のデザインの誕生へと導いて行こうと思っておりますが、ここにおいても関西の独自性は生きてくると思えます。

言語の力

「グローバル化の中で「文化」が果たす役割」

中野 ビジネスの分野にも必ず文化という要素がある。さすがは文化大国フランスという気がしますが、そこで個人的にとっても興味のあることをお聞きしたいのですが：世界経済は今「グローバル化」の方向にあり、一国の状況の変化が世界に影響を与えるというシステムの中にまとまろうとしているように思います。一方で「文化」というのは、その国がその国であるということを示すものではないか？ いわばグローバル化とは逆のベクトルであるとも言えるのではないのでしょうか？ 「文化大国」としてのフランスの総領事として、このグローバル化の中で、各国の「文化」が果たす役割が何であるとお考えでしょうか？

ブロー この話をすれば数時間かかりますね（笑）。確かにグローバル化がすすむことで、世界中の国々の社会の在り方・システムの違い、考え方の違い・慣習の違い……そういった多様性を軽視し、一つのモデルの中に集約していくということとは事実だと思えます。おっしゃる通りフランスは「文化」に対する自負心も強いので、自国の文化をいかにプロテクトしてゆくのかは大きな課題でもあります。ただ文化の力は様々な次元で経済的背景・要素に関わってくるものでもあるので、経済の完全なグローバル化がそのまま経済の発展につながるわけではないでしょう。例えば一つの製品が作られる背景にも、固有の文化的要素が必ずあるわけですから。文化の違いを認識しあうこと

は、相互のアイデンティティを保護しあうことにもつながる……その中でもフランスがもつとも意識しているもの一つは「言語」です。言語は「伝える」手段ではありますが、一方でその言葉を使う人間の思考を形作るものでもあります。そういった思考は言い換えれば文化そのものであり、それが「伝え方」「表現」というものを生み出すのですからアイデンティティとしての「言語」の重要性には計り知れないものがあります。逆に母国語でない言語で表現をするときに、何ともいえない違和感があるのもその所為でしょう。我々としては「フランス語で思考し、フランス語で表現する」ということを意識し続けたいし、それによっていかに経済のグローバル化が進もうとも、自国の文化・アイデンティティが力を失うことなく、存在し続けるのだからと信じています。

大学と社会のかかりに違い

小島 現在日本の大学は、大学の中で研究するというよりは、社会に対して学生が積極的に関係をもつという傾向を強めています。例えば企業とコラボレーションをして何かを生み出すといったものですが、フランスではそういった取り組みはありますか？

ブロー フランスの状況は随分違いますね。大学と企業という組織的な関わりではなく、大学生個人と企業の間の方が顕著です。グランゼコール（※6）はもちろん企業と直接学校が結びついていますが、それらを除いたほとんどの大学が公立なので、学校として企業との力を必要としていません。ただ徐々に国からの助成金も減少しつつあるので、企業との結びつきを深めて行く傾向にはあるようですが、むしろ、大学企業も重点を置いてるのは研修ですね。在学中にある一定の期間、学生がある企業で研修をし、その企業に入社する「スタージュ」という取り組みで、今では必須事項となっています。それが卒業に必要な単位にもなっているのです。日本の大学では卒業証書をもらってから企業に入って研修をし、社会体験をスタートしますが、フランスでは在学中にそれを行いますので、これは大きく違う点だと言えるでしょう。

小島 その研修先は学生自身が選ぶのですか？

ブロー 基本的には学生ですね。それを受け入れるかどうかは企業が決めるということになりま

す。

小島 フランスでも我々のように同じ大学を卒業した人が同窓会を組織するということはあるのでしょうか？

ブロー フランスの大学では卒業式や卒業証書の授与式といったようなものはありません。ですから

からいくら同じ年に卒業したからといっても特別なことだと感じる人は少ないでしょう。そういったネットワークの存在を聞いたことがありません。ただこれがグランゼコールとなれば話は別です。彼らの結束は非常に強いんですね。日本からもグランゼコールで学ばれている方は沢山おられます。そういった方は卒業して日本に帰った後でも、同窓会的なお付き合いを続けているはずですよ。一方、我々は、短い期間でもフランスで学んだことのある人たちが集う会「alumni」を設けたらいいと思っています。Facebookなどの活用も考えています。いずれにしても一定の経験を共有する人の集いとしての「同窓会」的な集まり、その重要性を我々も意識していると言っているのが実際ですね。

小島 我々も「alumni」（同窓・校友）のつながりを深めていきたいと思えます。本日はありがとうございました。

※1 京都フランス音楽アカデミー 1990年より運営されている日仏音楽交流事業。毎春フランスより教授陣を招聘し、アンステイチュ・フランス関西で2週間のマスタークラスを開講。2004年以来、パリ・エコール・ノルマル音楽院と提携。若手演奏家の交流を促進している。

※2 フランコフォニー フランス語圏諸国を旅するかのよう、アンステイチュ・フランス日本の各地方支部が開催するお祭り。

※3 フェット・ド・ラ・ミュージック 1982年、フランス国内の楽器演奏人口の半数が若者である事実に着目し、フランス文化省のモリス・フルレ音楽舞踊局長が構想を練り、ジャック・ラング文化大臣が創設した音楽祭。朝まで祭りを楽しめることを狙って開催日は夏至である6月21日に決定。プロもアマチュアも参加して街中で演奏会が開催される。すべて無料。数人でフランス最大級の文化イベント。

トとなる。1985年以降は海外にも伝播。現在は世界100カ国以上で毎年6月21日に開催されている。

※4 ニュー・フランス（白夜祭）パリ市が毎年行う一夜限りの現代アートの祭典。パリの姉妹都市・京都でも開催。京都市内各所で日仏の現代アートを無料で楽しめる。パフォーマンスや展示、プロジェクト・マッピングなど多彩な内容。

※5 ART OSAKA 日本で最大規模の現代美術に特化したアートフェア。生活空間に近いホテル客室を会場に展示され、気に入った作品はその場で購入可能。

※6 グランゼコール フランス独自の高等専門教育機関。エコール・ポリテクニクなどに代表される名門校で、200校ほどある。医学・神学の分野は存在しない。

2015年4月14日
アンステイチュ・フランス関西大阪にて

参考 関西学院同窓会 パリ支部 Website
"Kwansei Gakuin Alumni in Paris (France)"

今回の対談は在京都フランス総領事のシャルラン・ブロー氏。

対談が進むうちに、ラジオのフランス語講座を聴きながら、「フランスへ留学したい」と夢見っていた時期があったことを思い出しました。ブロー総領事がおっしゃるように、言語は「伝える」手段であると同時に、その言葉を使う人間の思考を形作るものでもありますから、グローバル化が進む中でも、私たちは、日本語の背景にあるさまざまな文化を身につけておかなければならないと感じました。

恒例のインタビュー10本目の今回は、株式会社立花エレクトック 代表取締役社長 渡邊武雄氏をお訪ねしました。

「思い切りやる」「手を抜かない」。渡邊先輩のすごい行動力に感服しました。また、難しい問題を積極的に引き受けることで鍛えられ、それが人を引きつけるというのにも納得です。ややもすれば無難なことを選びがちですが、渡邊先輩を見習い、挑戦を続けたいですね。

編集室長 小島幸保（1995年法学部政治学科卒）



小島 幸保

- 生年月日 1972年(昭和47年)7月7日
- 大阪女学院高校 1988.4-1991.3
- 関西学院大学法学部政治学科 1991.4-1995.3
- 最高裁判所司法研修所 司法修習生(第52期) 1998.4-2000.3
- 弁護士登録(大阪弁護士会) 2000.4
- 小島法律事務所開設 2006.4